

人間関係形成指導一覧

各項目	目標の目安	指導・支援方法	配慮事項など
(1) 他者とのかかわりの基礎に関すること。	(a) 他者とかかわりをもとうとする。	(イ) 他者とかかわりが心地よいと感じられるように、安心できる環境を設定し、教師と快情動を共有できるようにする。 (ロ) インリアルアプローチなど言語による働きかけによって他者に興味をもったり、自分が他者に影響を与えていることが分かったりできるようにする。	・自閉症の児童生徒は、人々の動きがとても速く、複雑なものに感じられ、かかわりの仕方に混乱を生じやすい。落ち着いた環境で、短く分かりやすい表現を使いコミュニケーションを図る。
	(b) 他者に援助を要求することができる。	(イ) 自らの表現手段を得られるように、VOCA や絵カードなどの補助代替コミュニケーション (AAC) を活用できるようにする。 (ロ) 要求行動が発せられるように、楽しい遊びなど児童生徒が好む活動を行い、かかわりを求めようとする気持ちを育む。	・補助代替コミュニケーションは、発語がある場合であっても、さらに適切な発語を促進する効果が認められている。 ・人とかかわりは、物とかかわりに比べ、複雑な認知が必要とされるため、安心して活動に取り組めるよう環境の構造化が必要である。
	(c) 他者と共通なものに注意を向けることができる。	(イ) 他者と自分が共通の対象物に注意があることを理解できるよう、具体的な物や絵カードを使ってやりとりをしたり、絵本の中の特定のキャラクターについて会話をもったりする。 (ロ) 他者の視線の先を目で追うことができるように、離れているものを指さして注視しながら話しかける。	・自閉症では、このような共同注意に発達の遅れがあるので、集中しやすくリラックスできる環境を整えて活動に取り組む。 ・最も初歩段階の指導としては、関心を示して見ている物について教師が指さしたり言語化したりする。
	(d) 他者の働きかけや指示に応じることができる。	(イ) 「頭を触って」など言葉や絵カードで簡易な指示をしながら教師がモデルを示して、動作模倣をできるようにする。その後、徐々に言葉や絵カードのみで応じられるようにする。 (ロ) 他者とかかわる経験を増やせるよう、授業の中に、他の生徒とやりとりする機会を多く設定する。	・話者に注意を向けられるよう、名前を呼びかけたり、視覚的なサインを出したりして話者の顔を見てから指示を出す。 ・活動は楽しい雰囲気の中で行い、簡易なことでもできたときには十分に賞賛する。
	(e) あいさつ、許可、禁止、依頼などの言葉の理解、表現ができる。	(イ) どのような場面で、どのような対応をすればよいか理解できるよう、ロールプレイなどにより、場面ごとに対応の仕方を身に付けられるようにする。 (ロ) 各教科などの授業の中に他者との対応が必要となる場面を設定し、繰り返し経験を積めるようにする。	・障害のある児童生徒は、普段の生活の中で自然と身に付けることが難しい行動が多くあるので、ソーシャルスキル教育を設定するなど、その行動の一般化を行えるような授業づくりをする。
(2) 他者の意図や感情の理解に関すること。	(a) 他者の表情や態度から感情を弁別できる。	(イ) 表情の違いから感情が理解できるよう、各感情を示した絵や写真を用意したり、対応する感情語を提示したりする。 (ロ) ストーリーのある絵本などを用い、感情を表現している場面で顔の部分の隠して、場面に合う表情を生徒が選択できるようにする。	・障害によっては、顔の表情の特徴を捉えられない児童生徒がいる。怒ったとき、笑ったときなどの目や口の変化に注目するように促す。
	(b) 「うれしい」「かなしい」などの感情語を適切に使用できる。	(イ) 状況に応じて感情語が使用できるように、日常の場面で教師が感情語を分かりやすく使用したり、児童生徒の感情を言語化したりする。 (ロ) 帰りの会などで、一日の嬉しい場面や悲しい場面を振り返り、ノートに記述したり発表したりする機会を設定する。	・障害によっては、感情の表出が困難であり、悲しみを表現できず、怒りによる暴力として表現されることもある。本人が表現できない場面でも、教師が感情を受け止めていくようにする。
	(c) 場面によって言葉の意味が異なることを理解できる。	(イ) 「適当」「結構」「いい加減」など状況により意味の異なる言葉があることを理解できるよう、このような言葉と状況との関係について一つ一つ示していく。 (ロ) 友人の親しみを込めた冗談とからかいとを混同して怒り出すことがないように、一つの言葉だけでなく、前後の状況を捉えて考えるソーシャルスキル教育などを行う。	・自閉症などでは、想像力の弱さから、物事を一面的に見て判断する傾向がある。相手の言葉を一義的に捉えて、責められているという被害意識もちやすいので、様々な場面を想定した学習をする必要がある。
	(d) 他者の欲求や意図を理解して、適切な対応ができる。	(イ) 様々な状況を示した絵や写真を用意し、その中の人物が考えていること、感じていることを発表できるようにする。 (ロ) 状況による他者の意図と対応の仕方が理解できるよう、様々な場面設定をしてロールプレイを行う。	・自閉症の児童生徒には、他者の心の理解に大きな困難がある。状況と気持ちを視覚的に理解できるようにしたコミック会話などを活用すると良い。
	(e) 自分と他者では考えが異なることが分かる。	(イ) 人はそれぞれ考えが異なることが理解できるよう、クラスで「好きな食べ物」などを発表し合い、それぞれの意見を尊重できるようにする。 (ロ) 他者と差異があることを理解できるように、特定の状況を示した絵や写真、物語などについて意見や感想を発表し合う機会を設定する。	・絶対評価に固執するために他者とのトラブルが多い児童生徒には、相対評価や文脈的评价ができるような指導・支援を行う。

AAC (Augmentative and Alternative Communication : 拡大代替コミュニケーションとも言う)

各項目	目標の目安	指導・支援方法	配慮事項など
(3) 自己の理解と行動の調整に関すること。	(a) 自分の得意なことや不得意なことを理解する。	(イ) 自分自身でできること、他者の助けを必要とすることが理解できるよう、サポートブックなどの作成を通して指導していく。 (ロ) 自己に対するイメージや行動の特徴などを理解できるよう、授業の中で他の児童生徒とかかわる体験を増やし、自分への評価がフィードバックされるようにする。	・障害のある児童生徒は、他者とかかわる体験が少ないため、他者と比較しての自己イメージをつくれなかったり、保護者や教師など大人だけの評価により偏った自己イメージをつくりやすかったりするので、学校では、他の児童生徒とかかわる場面を意図的に増やす必要がある。
	(b) 静かに座っていたり、待っていたりすることができる。	(イ) 静かに座って活動できるよう、課題を工夫して難易度を調節したり、興味をもてるようにしたりする。また、活動の始点と終点を明確にする。 (ロ) 待つことを指示されたときに待ってられるよう、一定の時間待っていたら次に好きな活動ができるような経験を増やしていく。	・ADHD など多動性の障害がある場合には、動ける活動や役割を意図的に設定し、不適応行動としての離席などを減らしていく。
	(c) 自分の感情の状態を理解できる。	(イ) 自分の感情が、どのような状態か理解できるように、落ち着いた状態、少し怒っている状態、我慢できないほど怒っている状態などの段階を視覚的に示すようにする。 (ロ) 感情がどのようなものか理解できるよう、胃が熱くなる、呼吸が荒くなるなど身体の様子に着目して表現してみる。	・自分の感情の状態が理解できることによって、静かな場所で休むなど、気持ちを落ち着けるための行動や援助の要求ができるようにする。 ・自閉症の児童生徒は、ストレスへの耐性が弱いので、生活全般に渡りストレスが蓄積されないような配慮が必要である。
	(d) 他者に対して行動の制御ができる。	(イ) 他者に対する攻撃的行動が無くなるよう、行動のアセスメントを行い、適切な行動に代替できるようにする。 (ロ) 他者に対する自分の行動を客観的に考えられるよう、ソーシャルナラティブなどを活用して、自分の行動を理解できるようにする。	・障害のある児童生徒の行動問題への対応には、応用行動分析などにより問題となる行動を理解することで、適切な対処方法を考慮していく。
	(e) 余暇を適切にとることができる。	(イ) 休み時間など自由に使える時間を適切に過ごせるよう、一人または友人と楽しむことができる活動を増やす。 (ロ) 活動や休憩の区切りがつけられるよう、視覚化したスケジュール表を用意したり、タイマーなどを活用したりする。	・家庭では、自由に使える時間が多くあり、趣味や興味をもって行える活動がないと、そのような時間に行動問題が起きやすい。卒業後のことも考慮し、余暇を過ごせるスキルを身につける必要がある。
(4) 集団への参加の基礎に関すること。	(a) 自分の役割を理解して行動できる。	(イ) 自分の役割を責任をもって果たしていけるよう、係の仕事や授業中の役割分担を多く取り入れ、視覚的に分かりやすい表などで確認しながら取り組めるようにする。 (ロ) 自己肯定感や有用感をもって活動に取り組めるよう、評価カードなどを用意して、自己評価をしたり、教師や他の児童生徒が肯定的な評価をしたりする。	・障害のある児童生徒は、失敗体験や他者から良い評価を受けることの不足から自己肯定感が低下しやすい。自己評価・他者評価によって自己肯定感を高められるような場面を設定する必要がある。
	(b) 様々な場所で、その場にあった適切な対応ができる。	(イ) 公共の場所で適切な行動ができるよう、様々な場面を想定したソーシャルスキル教育を行う。 (ロ) 授業の中に順番を守ったり、協力したり、物のやりとりをしたりする場面を設定し、多くの経験から適切な対応を身に付けられるようにする。	・障害のある児童生徒は、公共の場での経験が不足しているので、授業の中に公共の場で行われる応対場面を設定して体験を増やせるようにする。
	(c) 大勢の集団の中で落ち着いて過ごせる。	(イ) 集団活動への参加ができるよう、環境に考慮して声や音の大きさを調節したり、聴覚に感覚過敏がある場合には、耳栓などの使用を促したりする。 (ロ) 集会や式などに落ち着いて参加できるよう、分かりやすい進行表を用意したり、内容を把握できるような事前指導を行ったりする。	・特定の音や声などへの感覚過敏は、大人になってもなくなることが多いので、環境の調節や道具の使用で対応できるようにする。また、人数の少ない集団から少しずつ慣れるようにする。
	(d) 地域で、活動の場まで移動できる。	(イ) 友人の家や遊び場などに一人で行くことができるように、歩行学習などで交通ルールを指導したり、生徒の理解しやすい地図を作成し、自宅との位置関係を示したりする。 (ロ) 地域の交通機関を利用できるよう、利用方法や公共のマナーが身に付くソーシャルスキル教育を行う。	・移動手段に制約があるために、買い物や友人との交流などの社会参加ができないことが多い。保護者との協力によって少しずつ移動スキルを身につけていけるようにする必要がある。
	(e) 友人との関係を維持することができる。	(イ) 特定の友人についての意識が高まるよう、仲の良い友人と楽しんだことなどを、日常的に話題に取り上げていく。 (ロ) 友人との関係を長く維持できるよう、約束や秘密を守るなどの基本的なルールや寛容的にかかわることの大切さへの理解を促していく。	・障害のある児童生徒は、教師や家族以外のかかわりが乏しい場合が多い。特定の友人に関心をもったり、トラブルなくかわるための方法を身につけたりして、友人との交流を支援していくことが大切である。